表層 深層

局地豪雨 予測に限界

早期避難に難しさ

熊本県南部を襲った集中豪雨で、心肺停止の状態で見つかる人が多数に上った。雨は3日から降り始めたが、局地的な気象の予測には技術上の限界があり、気象庁は4日未明まで大雨特別警報を発表できなかった。先を見通し、注意報や警報の段階でいち早く避難を促す難しさがあらわになった。

（1面関連）

豪雨の影響で球磨川が氾濫し、水に漬かった熊本県人吉市の市街地（4日午前11時48分）

豪雨の影響で水に漬かった人吉市の市街地で、ボートで救出された男性（4日午後5時43分）

熊本県人吉市の自営業平澤ちえ子さん(52)は、実家1階の和室で畳が球磨川から流れ込んだ泥水にぷかぷかと浮かんでいるのを見た。消防団の力を借りて80代の母親を近くの寺に避難させたが、2匹の猫の面倒を見なければならなかった。

豪雨が降ったイメージ

自宅に戻ろうにもさらに雨脚が強まり、外に出ることに危険を感じるほどになった。その後、雨が落ち着き、家の外に出られたが「前日に特別警報が出たり、避難の呼び掛けがあったりすれば逃げられたかも」と感じたという。

クリック

球磨川　熊本県水上村の源流から人吉盆地、八代平野を経て八代海に注ぐ九州屈指の1級河川。国土交通省によると、延長115キロ、流域面積1880平方キロ。源流や中流域のほとんどは狭い地形で、最上川や富士川と並ぶ日本三急流の一つであるとともに観光のシンボルとして「舟下り」が有名。流域は河川水を利用した肥沃（ひよく）な穀倉地帯だが、洪水が起こると被害が大きくなるため「暴れ川」との異名がある。

3日午後、気象庁ホームページで公表されている降水短時間予報で、熊本県南部付近に赤紫色や赤、オレンジ、黄色の帯が表れていた。線状降水帯だ。一つの積乱雲の寿命は1時間程度だが、連続発生し、風に吹かれることで同じ場所に雨を降らせることで知られる。日本で発生する多くの豪雨は線状降水帯が原因と考える専門家もおり、注意を要する気象現象だ。

雨量500ミリ超えも

「まさかここまで降るとは…」。ある気象庁関係者は4日、肩を落とした。大雨の可能性は3日の段階で予測していた。同日夕には熊本地方気象台が翌日夕までの24時間雨量を熊本県内の多い地域で200ミリと予想し、警戒を呼び掛けていた。

だが、実際の降り始めからの雨量は場所によっては500ミリを超えた。

線状降水帯の発生は上空の風や地形の影響を受けるとされ、現代の技術でも予測が難しい。大雨特別警報は基準を満たさなければ発表できず、しかも発表された際には既に災害が起きている可能性が高いため、「自分や家族の身を守るため、さまざまな情報を元に遅くとも警報の段階で避難を決断し、行動に移してほしい」というのが気象庁の基本的な立場だ。

しかし気象庁は昨年10月、台風19号の上陸に先立って「大雨特別警報を発表する可能性がある」と発表したことがある。夜間や雨脚が強まってからの避難は危険だ。今回も3日の日中に会見を開き、避難を直接呼び掛ける余地はあった。

会見機会逸する

会見を開くかどうかは総合的な判断が求められる。しかし結果的に気象庁は予想雨量の少なさなどから臨時会見を開くタイミングを失った。もし500ミリもの雨が降ると分かっていたら特別警報を出す前に会見を開いていたかー。気象庁の別の関係者は「開いていたと思う。頻繁に会見を開き、予想が外れれば信じてもらえなくなる恐れはあるが…」と唇をかんだ。

災害リスク学が専門の東京女子大の広瀬弘忠名誉教授は「これまでの災害経験が通用しない時代だ。正確な予測は難しいが『空振りしてもよい』ぐらいに腹をくくり、前もって強く警告を出し、避難を求めていくことが必要ではないか」と話した。

中國新聞 SELECT
きょうのセレクト
❸進むトランプ離れ
❺自殺の解明 阻む学校
❼初夏の味 きらめく銀
⓬海外メール 香港
中国新聞の購読・試し読みは 0120-492-506